



2019年5月～2019年10月（2019年度前期）を振り返って

先日、台風19号によって堤防が決壊した長沼地区の復興住民集会に参加しました。一番多かった住民の意見は、「強い堤防を作って欲しい」というものでした。他には、「これまでもずっと訴えてきたのに危険性が伝わってこなかった」「若い人の意見を取り入れて、二度とこういうことが起こらないようにしてほしい」「安心感がないと定住できない」「集会所や支所を3階建てにして、避難できるようにしてほしい」等の意見がありました。多くの意見を聞く中で、おそらく住民の方々が一番言いたかったことは、「自分が経験したことを、他の誰にも経験してほしい」ということなのだと感じました。長沼の堤防を強化しても、別の地域で堤防が決壊したら同じような悲劇が繰り返されます。それは今回被災された人たちが望むところではありません。地域を超えて千曲川流域地域住民全体として「こえ」をあげ、今回の水害発生の要因をきちんと科学的に検証、対応策を取り、流域住民が、安全・安心を実感できる持続的な地域の展望を持つことが大切なのだと思います。

検証は、堤防の場所や高さ、強度といったハード面のみならず、今回逃げ遅れた方がいた以上、防災計画や訓練等のソフト面、そしてそもそも「自然が持つ人間にとっての大きな負の力（ハザード）」、つまり、頻繁に発生する台風や記録的大雨自身、日本では関心の薄い「気候変動」にも目を向けざるを得ません。2018年6月大阪北部地震、7月西日本豪雨、9月北海道胆振東部地震、2019年8月九州北部豪雨、9月台風15号、10月台風19号。この1年間に日本で発生した主な自然災害だけでもこれだけあります。理由は様々ですが、1つ1つに包括的な検証と行動が求められています。

昨年度から、アイキャンは、海外の課題を解決する団体から、日本国内と海外の両方の課題を解決する団体に生まれ変わろうとしています。頻繁に自然災害が発生する今の日本において、今回のように、アイキャンが、これまでの海外での経験を活かして自然災害の被害を最小限にしていくことが、社会からこの団体に求められていることの1つだと認識しています。「一人ひとりの『アイキャン』を、大きな力に」。この理念はどのような課題を解決する際にも変わることはありません。

さて、今期ですが、5月にアイキャンの東京事務所が秋葉原に、大阪事務所が梅田に開所いたしました。これによって、アイキャンの拠点は、本部の名古屋を加え、国内3箇所となりました。6月に愛知県の高校のフィリピン研修の実施、7月に総会を開催、8月にジブチのイエメン難民キャンプで子どもの施設の完成式典を開催、9月にフィリピンバヤタスゴミ処分場での子どもの保護活動再開、10月に中高生がSDGsの達成を促進するイベント「中部SDGs for ユース」が開催されました。その他、多くの活動を継続できたのも、ひとえにアイキャンをともに作り上げてくださっている多くの寄附者、賛同者の皆さまのお陰です。心から感謝し、会報を送付させていただきます。



ICAN 事務局長
井川 定一

特集 1 : 長野県で台風 19 号の緊急救援活動を実施している事務局長井川

2019 年 10 月から長野県において実施している緊急救援活動について、街頭募金やフェアトレードのボランティアである亀谷愛さんが、事務局長の井川定一にインタビューをしました。



アイキャン
事務局長
井川 定一

亀谷さん : 早速ですが、長野の台風 19 号被災地において、まず最初に行ったことは何だったのでしょうか。

井川 : 最初に行ったことは被害状況の調査です。長野市役所や社会福祉協議会の訪問では、被害状況の全容は掴めなかったため、地域の方の SNS や聞き取り等の情報を集約し、被害が大きいと思われる地域を長野市の北から南まで車で周り、被害状況の調査するとともに、私たちにできることを探していきました。

亀谷さん : 調査には何日程かかったのでしょうか？

井川 : 調査だけを行っていたのは、1 日半ですね。大まかな状況を把握したらまず活動することが大切だと思っています。初日に千曲川決壊現場である穂保にも行きましたが、泥の量が多く、立ち入り規制もあり、活動ができる状態ではありませんでした。2 日目の昼、調査の過程で長野市の隣に位置する千曲市において、幼稚園が水没し、困っていた先生方と出会い、その午後からその幼稚園で水没した物資の救出活動を行いました。3 日目は、1 名は幼稚園での活動を継続しつつ、もう 1 名は知人から救援要請を受けた長野市松代東寺尾の調査に入りました。

亀谷さん : そこで、松代や穂保でのボランティアコーディネート活動が始まるわけですね。

井川 : はい。具体的な活動は、マンスリレポートとして報告した通りですが、松代では公民館で、穂保ではボランティアセンターで、1 日 1,500 人を超えるボランティアコーディネートを毎日行ってきました。(詳細 : P11)

亀谷さん : なるほど。アイキャンが入る

ことで変化はありましたか。

井川 : ボランティアセンターにおいて、地域を「点ではなく、面で見ると」形に変えたことでしょうか。穂保ではアイキャンが入るまでは、ボランティアセンターは被災者からの電話を受け、ボランティアを派遣する、つまり「被災世帯を点で見ていた」のです。その結果、電話はパンクして繋がらない、ボランティアも派遣まで半日も待つ、地域の全容も見えないということが生じていました。そこで、アイキャンが入り、毎日前日に地域全家庭訪問を行い、翌日の各家庭の必要ボランティア数を把握し、それを 1 枚の地図に落とす。翌朝ボランティアさんが到着したら、前日作成した地図に基づき手前の家から 20 人、30 人という形で入っていただきました。つまり「ニーズを面で落として整理」しました。そうすることで、住民は電話をかけることなくボランティアを受け入れられ、ボランティアも待ち時間がほとんどない形で作業に入れる。連絡が取れない世帯、独居世帯、要福祉世帯等が、地図上どこにいるのかもまとめることができ、必要な対応を取れるようになりました。結果、ボランティアが 1 日 1,500 人、トラック 150 台が来てくださっても、適材適所で配置をすることができました。



亀谷さん : それは大きな変化ですね。

井川 : はい。長野市災害ボランティアセンターには、6 万人を超えるボランティアが来ていただきましたが、効率よく活動していただくためには、コーディネートの「質」がとても大切です。

亀谷さん : 今後どのような活動を行っていくのか具体的に教えてください。

井川 : 3 月末までということであれば、大きく 3 つあります。まず、1 つ目に穂保地区の災害ボランティアセンターでのボランティアコーディネートを継続

します。2 つ目として、大量の被災写真を多くのボランティアとともに洗浄し、持ち主に返却する「長野写真洗浄プロジェクト (<https://nagano-senjyo.jp/>)」を実施していきます。3 つ目に、地元で復興に関わる NPO や任意団体への運営アドバイスや市民活動スペースの無料開放を行っていきます。4 月以降は、災害以前の地域より良い地域をつくる活動を展開していくことになると思います。



亀谷さん : 長期的に活動して行かれるのですね。

井川 : 多くの団体は 3 月で地域を離れまし、正直、悩みました。実際、地域の復興には何年もかかりますが、このままだと、この地域はゴーストタウンになってしまうことは明らかです。アイキャンは、災害直後から住民の方々とは毎日接し、ボランティアをコーディネートし、その結果、住民の方々から大きな信頼を得ることができました。それは、ボランティアに来てくださった何万人の方々の方々の汗と努力によって培われたものです。その一人ひとりに、「アイキャンに何を望むか」とも尋ねることができたら、「お預かりした信頼」を途中で投げ出すことなく、最期まで復興に活かしてほしいと思うんです。多く人が、この地を忘れたとしても、メディアでこの地が放送されることがなくなっても、アイキャンは、続けるべきなんです。

ボランティア
亀谷 愛さん



特集2 : 「中部 SDGs for ユース 2019」を推進する日本事務局西坂

教育機関と連携して今年度から実施している「中部 SDGs for ユース 2019」について、アイキャンの語学教室「スマイルチケット」の生徒であり、アイキャンスタディーツアーの参加者でもある田中さんが、日本事務局の西坂幸にインタビューをしました。



アイキャン
日本事務局
西坂 幸

田中さん:最近 SDGs(エスディーゼーズ)という言葉をよく聞くようになりました。具体的にはどういうものなのですか。

西坂:SDGs とは、2015 年に国連で採択された世界共通の目標です。日本語にすると「持続可能な開発目標」と言われています。誰一人取り残さない社会の実現を目指し、経済・社会・環境をめぐる広範な課題に総合的に取り組むため、2030 年に向け、世界全体が共に取り組むべき普遍的な 17 の目標を定めたものです。

田中さん:SDGs への取り組みはどのようなところで行われているのですか？

西坂:行政だけでなく、企業や教育機関、一般市民の中でも取り組みは増えてきています。企業では CSR の一環としてのみならず、本業を行う上での指針として SDGs を掲げているところも増えてきています。社会問題に対して関心の強い学校では、SDGs への取り組みも実施されています。次世代を担う彼ら、彼女らが、社会問題をしっかりと理解し、考え、行動に移していくことはとても大切だと考えています。

田中さん:「中部 SDGs for ユース 2019」というイベントを開催されたと聞きましたが、どんな活動をされたのですか。



西坂:昨年度から、大きく 3つのプログラムを実施してきました。中部地域の中高生に SDGs の各目標に対し、絵とメッセージで身近にできる行動を表現して

もらったり(「SDGs 中高生アクションプラン」)、学校の SDGs に対する取り組みを募集(「SDGs スクールアクション」)したりしました。10月19日には「社会をもっとよくする高校生のプレゼン大会」(会場協力:名古屋国際中学・高等学校)を開催し、6つの高校生チームが SDGs 達成に向けた創造的なアイデアを発表しました。愛知県制作企画局(行政代表)、ブラザー工業(企業代表)、Dive TV(市民代表)からの3人の選考委員は、実施に向けた具体的な助言を行い、その後、発表チーム全てにアイキャンから活動資金を提供しました。チームは 2019年11月~2020年2月にかけてアイキャンが伴走型の技術協力を行い、アイデアを実現していきます。



田中さん:伴走型というのは、つまり、アイキャンが高校生たちと「ともに」活動するということでしょうか。また、高校生たちからは、具体的にどのようなアイデアが出たのでしょうか。

西坂:はい、そうです。高校生たちはとても創造的なアイデアを持っています。そこで、アイキャンは活動資金やアドバイスを提供し、高校生たちと「ともに」課題を解決していきます。具体的には、「SDGs の認知度向上」が2件、他、「アフリカの電化」、「地域コミュニティの活性化」、「海洋汚染問題啓発」、「フードロス対策」に取り組んでいきます。

田中さん:幅広い活動に取り組むのですね。今から楽しみです。積極的に取り組んでいる高校生たちがいることは分かったのですが、なかなか身近に地球的規模の課題を捉えられない高校生も多いのではないのでしょうか。

西坂:やはり、イメージがわかりやすいもの、そうではないものはあると思います。例えば、地球温暖化や海洋汚染は日本でもよく耳にしますし、何をすべきかイメ

ージがつきやすいですが、絶対的貧困や飢餓の問題等は、遠い存在のように捉えられがちで、解決に向けた具体的な行動



を考えるのは難しいようです。

田中さん:なるほど。世界の課題について学び、知り、理解を深める事で、課題が多すぎることに驚き、逆に悲観的になってしまう子はいないのでしょうか。



ボランティア
田中 学さん

西坂:これまで高校生と様々な取り組みをしてきましたが、悲観的になるよりも、「自分たちがなんとかしなきゃ」と思っている生徒の方が多いと思います。現実を知る事で、自分にできることはないかと意識するようになり、アイキャンのボランティアにはじめて参加したり、将来の進路が変わった生徒もいます。

田中さん:高校生たちに伝えたいことは何ですか。

西坂:社会を変えるためには行動する必要があることですね。そして、行動は、大人になるまで待つ必要性はなく、今、高校生だからこそその柔軟な発想や行動力があることを知ってほしいです。高校生の皆さんは、今すぐ地球全体を変えることも不可能ではないはずです。

田中さん:今後この活動はどのように展開していくのでしょうか。

西坂:まずは中部地域全域のより多くの若者に「中部 SDGs for ユース」に参加してもらうこと。そして、日本各地で同様の取り組みが行われ、全国規模で学びが共有されることを目指していきます。

2019年5月～2019年10月のアイキャンの活動

I 危機的状況にある子どもたちとともに行うプログラム

※アイキャンの事業年度は毎年5月1日に始まります。

1. フィリピン (アジア)

<首都マニラ近郊>

路上の子どもたちが危険と隣り合わせで生活する2つの地域において「路上教育」(モラル形成やキャリア教育、薬物の危険性や感染症の予防法等を含む保健衛生教育)を計16回実施し、延べ282名の子どもたちが参加しました。また、5か所の町役場を訪問し、子どもの保護を協働で実施するためのネットワーク形成しました。元路上の子どもたちによって運営されるカフェでは、フィリピン大学内の「勉強カフェ」を週4回営業しました。カリエメンバーとアイキャンスタッフによる経営や新商品に関するミーティングを2回開催し、近隣大学2校のニーズ調査を行いました。



児童養護施設「子どもの家」では、5名の子どもたちが、全員進級できました。最年長の子ども1名が自立訓練として企業で12日間のトレーニングをしました。

ごみ処分場周辺地域では、フェアトレード生産団体であるSPNP7名と25回のミーティングを通して、新しい市場開拓や組織強化について話し合いました。SPNPはバザーに3回参加し、フェアトレード商品を販売しました。また、協同組合PIC03名が行う診療活動を11回モニタリングしました。勉強や遊びを通して生きていく上で必要な知識を学ぶ「サバイタヨ」の活動を5回実施し、延べ195名の子どもたちが参加しました。



2. ジブチ (アフリカ)

ジブチ国内3つの全難民キャンプにおいて、子どもたちの状況を把握し、対応策を分析するために、家庭訪問1,416件と最善利益評価(BIA)104件を実施しました。保護者のいない、もしくは養育者から離れてしまった子どもたち等に「最善の利益」をもたらす方法を決定する最善利益認定(BID: Best Interest Determination)委員会に対し、17件の事例を報告しました。子ども及び大人6名に対してカウンセリングを行いました。アイキャン難民スタッフとキャンプ内の青少年によって運営される「子どもの広場」を週5回開催し、延べ8,644名が参加しました。青少年を対象に、子どもの心理や発達に関する研修を3回実施し、参加者延べ50名が知識を深めました。子どもたちが自ら司会進行を務める「子ども議会」は6回行われ、延べ101名の子どもたちが、自尊感情や環境問題等について活発な議論を交わしました。



難民コミュニティからの要望・提案を受け付けるためのレセプションデスクを週1回開設し、延べ197名が訪れました。「子どもの教育の権利」等がテーマの難民キャンプ内の啓発イベントは、延べ1,040名が参加しました。

イエメン難民のキャンプでは、イベントや集会などにも使用できる「多目的センター」の建設が7月に完成し、8月に完成記念式典が催されました。同キャンプにおけるアイキャンの活動や子どもの保護の概念を記載した啓発用看板3つと、難民からの匿名の要望や提案の受け付けも可能となるよう提案箱を2つ設置しました。また、7月に「子どもの広場」の屋根に太陽光パネルを設置し、活動中に電気が使えるようになりました。

受け入れコミュニティでの活動として、12月に開催予定のイベント準備のために7回会議が開かれ、地元コミュニティと難民コミュニティの代表者、延べ41名の話し合いが行われました。



3. イエメン (中東)

イエメンの中でも国内避難民を最も多く抱える州の1つであるタイズ州において、7月から8月にかけて、延べ6,880世帯(約48,160人)への食糧提供を行いました。9月には食糧提供の事後評価のため、アイキャンスタッフ2名による満足度調査等が行われ、裨益者からの意見を聞き取りました。



4. ソマリランド (アフリカ)

ソマリア北部ソマリランドの首都ハルゲイサ近郊において、4月に開始された干ばつを防ぐための貯水池の建設が完了し、10月より現地の人々の使用が開始されました。

5. 日本

大阪西成区にてニーズ調査を実施するとともに、台風19号被災地の長野県で、千曲市内保育園の復旧、長野市松代及び長沼でのボランティアコーディネート等を担いました。

II 「できること (ICAN)」を増やすプログラム

1. 能力強化事業

教育機関にて、計3回講演を行い、263名に対して路上の子どもたち及びイエメンの難民について話しました。企業等主催のイベントやセミナーでは計3回、74名を対象に路上の子どもたちをテーマに講演・報告会を行いました。ガールスカウトを含む3団体の事務所訪問を受け入れ、計11名へフィリピン事業について説明しました。



NGO 相談員業務として、東京のグローバルフェスタにおいて相談対応を実施しました。3つの教育機関で講演し、東京・愛知・名古屋への出張相談も行いました。今期は351件の相談を受け付けました。



中部 SDGs for ユースでは17の中学・高校から2,034名の生徒が参加し、SDGs 達成のためのアクションプランを考え、10月19日のプレゼン大会で発表しました。

チャリティ語学教室では、英語106回とタガログ語19回の授業を行い、15名の生徒が語学力向上に励みました。

フィリピンで3名のインターンを受け入れ、フェアトレード及び路上の子どもたちの事業補佐として活動しました。

フィリピンの事業地を訪問するスタディーツアーを1回、高校生と大学生を対象にした国際理解海外研修を各1回開催し、合計38名が参加しました。



2. ボランティア・寄付活動推進事業

名古屋及び大阪において、「フィリピン路上の子どもたちを応援する街頭募金活動」を計15回、「台風19号による被災地緊急救援募金活動街頭募金活動」を計8回実施しました。延べ151名のボランティアが参加し、延べ1,251の方が募金してくださいました。



ハガキ(計19,384枚)や古本等の収集活動を行い、延べ122名が事務局ボランティアを行ってくださいました。

今期、マンスリーパートナーが27名増えました。

フィリピンで「マニラ日本人文化祭」等3回、日本国内で「聖霊高校文化祭」等2回、計5つのイベントに出店し、ボランティア延べ30名がフェアトレード商品の販売をしました。販売を通して、フェアトレード商品を生産するフィリピンのお母さんたちの想いやフェアトレードの意義を一般市民に伝えました。



3. 政策提言事業

NGO と外務省の連携を推進する NGO 外務省連携推進委員会、NGO と JICA の連携を強化する NGOJICA 協議会の会議に参加し、日本の NGO と ODA の連携を促進しました。また全国の NGO が参加するアンケートを通じて、NGO セクター全体の意見集約を行いました。



今期のメディア等への掲載 (32件)

- 2019年6月20日 毎日新聞 イエメンの現状について
- 2019年7月17日 Yemen Sky, Marsad Aden, Yaman News, Yemen Online, Sabq Website, Rai Al Yemen, Yemen 60, Al Yemeni Al Jadeed, Sahafa Online イエメン・タイズ州での食糧提供について (9件)
- 2019年7月18日 Al Shahid News, Al Tagheer Net, Saba Net イエメン・タイズ州での食糧提供について (3件)
- 2019年7月18日 Suhail TV Channel イエメン・タイズ州での食糧提供について
- 2019年8月23日 Al Jazeera ジブチに住むイエメン難民の子どもたちとアイキャンの運営する子どもの広場
- 2019年8月27日 RTD (Radio Television of Djibouti) 子どもの保護センター・多目的センターの完成式典
- 2019年9月2日 JICA 広報誌 munda 9月号 アイキャンによる NGO 相談員としての対応の様子 (写真掲載のみ)
- 2019年9月6日 Al Moaten, Sahafatak, Al Marsad Newspaper, Al Bedda Newspaper, Al Bayan News, Al Yemen Mubasher Aden Al Ghad, Aden Lng イエメン・タイズ州での食糧提供について (8件)
- 2019年9月7日 Marsad Aden, Yaman News, Al Yemeni Al Jadeed, Al Sijl, Masader Net, Al Yemen Now, Yemen Sky イエメン・タイズ州での食糧提供について (7件)

2019年5月「イエメン難民キャンプで多目的センター建設」

<ジブチ事業>



ICAN ホック事務所
Mouhyadin Said
Djama

～プロフィール～
土木技師（エンジニア）。大学で建築を学び、卒業後、企業で建築業に従事。2018年8月より現職。

ジブチ北部に位置するマルカジ難民キャンプには、紛争を逃れてきたイエメン難民が約2,300人生活しています。枯れた大地の真ん中に位置するこのキャンプには、これまで心に深い傷を負った難民の子どもたちを守るための十分な施設がありませんでした。そこで2018年3月から、アイキャンは子どものカウンセリングを行ったり、子どもの保護の情報を一括して管理する「子どもの保護センター」と、保護者たちが子どもの将来について話し合ったり、子どもたちが気温が高い砂漠のようなこの土地でも自由に体を動かすことができる「多目的センター」の建設を行ってきました。前者は2019年1月に完成し、すでに活用が始まっています。

多目的センターの建設は、5月までに壁と屋根付けまで進みました。この建設作業を進めるにあたり、私は毎日マルカジ難民キャンプ内の建設現場に足を運び、指定された資材で建設が滞りなく行われているか確認してきました。初めの段階でジブチの建設業者に対して、なるべく難民の方々を雇用してほしいと交渉した結果、この事業の大半は難民の方々によって進められています。そうした従業員たちと会話をしながら、必要に応じて技術的な監督・指導を行ったり、進捗を確認することも、私の仕事です。

建設の指揮監督をする上で難しいと感じるのは、工程の管理です。5月はほぼ1か月、皆が断食するラマダン期間と重なり、かつ、40度を超える猛暑の中、従業員の意欲を落とさずに事業を進めていくのは非常に大変でした。ジブチはのんびりとした文化のため、従業員を無理に急かすこともできません。普段のコミュニケーションのおかげで、何とか彼らを鼓舞しながら、建設を進めてきました。また、建設に携わることで、

難民の従業員たちの収入は増え、生活が改善しており、それも彼らのやる気につながっています。他にも、キャンプ内に住む人々から「アイキャンは子どもたちのためにいいことをたくさんしてくれる」という声をよく聞きますし、現地政府及び国連機関からも完成を待ち望む声があがっており、そのような期待も私のやる気にも繋がっています。また、困難に直面しても、建設業者が融通を利かせてサポートしてくれたり、必要に応じて提案をしてくれるので、信頼関係が築けていて仕事をしやすいと感じます。

多目的センターの完成は2019年7月を予定しており、建設自体は残り1か月で終了します。今後、難民及び地域の人々にとって重要な拠点として、何十年も使われていくことを願っています。



ある日のスケジュール

8:00 建設現場の監督
10:00 日報・週報作成
13:00 建設業者と打ち合わせ・進捗状況確認
15:00 打合せ内容のまとめ作成
16:00 建設進捗確認
16:30 進捗報告作成
17:00 帰宅

フィリピン事業（マニラ・路上） 5月8日／サンマテオ（フィリピン）

子どもの家で誕生日会を開催



5月8日、子どもの家に住むマーク君は16歳の誕生日を迎えました。共に生活をする他5人の子どもたち・寮母・ソーシャルワーカー・アイキャン職員がバースデーソングを歌っている間、マーク君は照れ臭そうでしたが、普段食べないケーキ

やみんなが作ったごちそうを前に、満面の笑みを浮かべていました。寮母は「子どもたちの幸せそうな様子が見られたので、誕生日会を実現できてよかった。」と話しました。

チャリティ語学教室

5月11日／愛知

世界課題を、英語で考える



チャリティ語学教室スマイルチケットでは、ウォームアップとして、毎週異なる「世界」に関するトピックを決め、世界の多様性について話し合っています。この日は、SDGsの達成率が最も高い国はどこか、というテーマで議論を行いました。

また、SDGsの目標を実現するための取り組みについても意見交換を行いました。先生からは「質問形式で楽しみながら世界について学ぶ事もできる。」との声を頂きました。

フィリピン事業（マニラ・路上） 5月15・22・24日／ケソン（フィリピン）

カリエカフェの新商品開発会議



フィリピン大学キャンパス内のカリエカフェを運営する、元路上の子どもであるメンバーたちは、より一層の集客を図るため、新商品であるマンゴーシェイクの試作を行うとともに、費用計算をしたうえで新商品開発の会議を開きました。「学生が小腹を満たせるテイクアウトを出したい」という19歳のカリエカフェメンバーの提案から生まれたマンゴーシェイクは、6月からの販売に向けて最終調整中です。

街頭募金

5月25日／愛知

悔しさを感じながらも、発信することの重要性を再認識



学生・社会人計14名のボランティアの方々が街頭募金活動に参加し、フィリピンの路上の子どもたちのための寄付を呼びかけました。30度を超える猛暑の中での活動となりましたが、参加者からは「街頭募金には初めて参加したが、今後も事務所でのボランティアに加えて募金活動も継続したい。」や「チラシを受け取ってもらえない時は悔しかったけど、呼びかけに耳を傾けて興味を持ってくれる人を大事にしていきたい。」などの声がありました。

2019年6月「国内3拠点、新体制での活動が開始」

<国内事業>



ICAN 大阪事務所
井上悠
～プロフィール～
大学院卒業後、公益
財団法人にて勤務、
出産を機に退職。
2019年5月入職。

今年で25周年を迎えたアイキャンは、事業のより一層の充実と持続的な体制へと転換するため、本部事務所がある名古屋に加え、大阪と東京に新たに事務所を構え、新体制がスタートしました。現時点では、まだ内部の業務分担の調整等の体制作り専念しており、大阪での街頭募金ボランティアを除いて一般公開はしていませんが、今後徐々にアイキャンの活動を活性化させていきます。

今回、新たに2箇所ですべて事務所が開所したことで、すでにいくつかの良い効果ができています。例えば、名古屋の事務局では業務量が問題になってきましたが、少しずつ大阪や東京の職員に分担されてきていますし、海外での経験をもとに、貧困や教育格差といった国内の課題の解決に向けた調査も行われています。大阪の事務所ですでにイエメン内戦に関する取材では、6月20日の「難民の日」に新聞の一面を通じて、イエメンの現状とアイキャンのメッセージを多くの方に届けることができました。今後より多くの効果が見込まれています。

6月、これまで名古屋の事務局が毎月実施してきた街頭募金を参考に、大阪で街頭募金活動を開始しました。一回目の8日は、大雨ということもあり2,100円の募金額から始まりましたが、二回目の15日は3,387円、三回目の22日は12,357円と徐々に募金額が増えていきました。ボランティアさんの輪も広がっています。街頭募金活動の数日前にフィリピンの路上の子どもの動画を見て、縁を感じ街頭募金活動にご参加して下さった

50代男性、子どもの貧困と教育に関心を抱く高校生、ずっと何かしたいと思っていたが何もやっていない自分を変えたかった、と熱い志を持つ社会人男性など、ボランティア参加の背景には様々な想いと強い使命感があることも学びました。



世界も日本も課題が山積みです。これまで名古屋を中心に培ってきたネットワークと実績を踏まえ、東京、大阪それぞれの地域性を活かし、地域に開かれたボランティア・寄付推進活動の機会を提供することで、1つ1つ社会の課題を解決していきます。アイキャンの活動に共感していただき、募金活動に参加して下さる方、ご寄付をして下さる方を募集しています。私たちとともに、世界の危機的状況にある子どもたちとともに、アイキャンを実践していきましょう。

ある日のスケジュール

9:30	メールチェック
10:00	フィリピン絵画の確認
11:00	街頭募金活動報告書作成
12:00	全体会議
13:00	Web 広報の更新
14:00	街頭ボランティア申込み対応
15:00	帰宅

フィリピン事業（マニラ・路上） 6月9日/パヤタス(フィリピン)

第五回マニラ日本人文化祭への出店



今回で5回目となるマニラ日本人文化祭に、アイキャンとフェアトレード生産者団体SPNPが出店しました。子連れの日本人家族や日本人文化を好むフィリピン人等約1,400人が来場しました。生産者のお母さんたちが一つ一つ心を込めて作った手作りの「ひよこ」や「たこ」などの編みぐるみがとても人気で、ブースではお母さんたちがおらかな雰囲気、来場した子どもたちの心を掴んでいました。

能力強化事業（講演） 6月26日/東京

日本郵船株式会社様本社での活動報告



フィリピンの路上で生活する子どもの事業に対し、継続的にご寄附をいただいている日本郵船株式会社様の本社にて、活動報告会を行いました。来場者からは、「寄附がどのような活動に役立てられているのかを、実際に活動されている方から聞くことができよかったです。」「これから日本でボランティアを始める予定なので、子どもとの接し方で何かアドバイスを貰えると嬉しい」などの声がありました。

ジブチ事業

6月11・17・18日/マルカジ・ホルホル・アリアデ(ジブチ)

子どもの教育権利に関する理解の向上



難民キャンプにて、子どもの教育を受ける権利に関する啓蒙活動を行いました。基本的な子どもの教育の権利に始まり、大人によって子どもの権利が阻害されている具体的な例、その結果起きる弊害、そして自分たちでできる解決

方法について話し合いました。参加者からは「障がいの有無や性別に関係なく、みんな同じく教育を受ける権利がある、ということを理解した」という声がありました。

能力強化事業（NGO 相談員）

6月12日/愛知

愛知淑徳大学での出張サービス



愛知淑徳大学にて「NGO 相談員」の出張サービスを行い、学生約60名に対して講演を行いました。NGOの活動を通して世界の現状について知ってもらった後、グループワークを行い、「自分たちにできる事」を具体的に考えてもらいました。知っているだけではなく、考えて行動を起こす事の大切さ、小さな事でもやり続ける事や多くの人が取り組む事の大切さについて考えを深めてもらうことができました。

2019年7月「人々の生命線である食糧提供」

<イエメン事業>



ICAN イエメン事務所
Abdulmalek Aqlan
Mohammed AL-aqab
～プロフィール～
大学卒業後、MBA を取得。複数のイエメンの NGO を経て、2016年3月に入職。

私は普段首都のサナアに住んでいますが、今、食糧提供のためにタイズ州に来ています。イエメンの紛争が激化してからもうすぐ4年半が経ちますが、依然として、各地で激しい戦闘が続いています。特に、南部に位置するここタイズ州は、政府軍と反政府軍の攻防の最前線であり、最も被害が激しい州の1つです。以前は町の中心部まで15分で行けましたが、道路は各地で寸断され、現在では山と谷を越える悪路を通り数時間もかかります。路上にはごみが溢れ、安全な飲料水の不足等から、コレラやマラリアが蔓延しています。電気もありません。イエメンの通貨は暴落し、生活必需品の物価高騰が続いています。家の中で明かりをつけたり、屋上へ上がるだけでも撃たれる危険性があります。同地域のモスクは、以前礼拝に向かう人々が狙撃兵により射殺されてしまったことをきっかけに、2年間以上閉鎖されています。このような明日さえも見えない生活は、この地に住む人々を苦しめています。

アイキャンでは2016年からここタイズ州で食糧提供を実施しています。これだけ前線に近い地域において、安全な提供場所を確保するのは大変なことです。人々が食糧を持って移動する負担を考えると、なるべく住んでいる地域から近いところで実施しなければならず、治安当局と協議して提供場所を慎重に選びます。今回の提供は1回につき、これまでで最大規模の1,720世帯への提供だったため、提供日時を朝と夕方に分けたり、提供場所を複数設定する等して、調整を行いました。よりスムーズに提供を行うため、提供後には住民からの意見を基にみんなで振り返りを行い、翌日以降の提供時に改善するよう心掛けました。例えば、初日の提供場所では想定以上の人数の住民が早くから並び、一部は日よけのない状態で待つことになってしまいましたが、翌日以降の提供時には、日よけができる場所を作り、住民の負担を減らすことができました。

提供時、寡婦世帯や病気で働けない人々、全てを諦めて逃れてきた国内避難民の方々から「紛争が始まって以来、初めての食糧提供を受け、とても感謝している」という声が多く聞かれました。私たちが行っている食糧提供は、多くの人々にとって生命線です。今後もアイキャンの一員として、人道的義務を果たし、一人でも多くの人々の命をつないでいきます。



ある日のスケジュール

- 8:00 メールチェック
- 9:00 食糧提供準備
(裨益者リスト・配布カード作成)
- 13:00 食糧業者へ連絡
- 15:00 食糧提供チームとの打ち合わせ
- 16:00 食糧提供実施報告書作成
- 17:00 帰宅

ソマリア事業

7月/ソマリランド(ハルゲイサ)

干ばつを防ぐ貯水池の完成



ソマリアでは、2011年干ばつと食糧高騰に起因する飢饉により、26万人の命が失われました。その後も毎年続く水不足により、多くの人々や家畜に被害が出ています。アイキャンは、ソマリア北部ソマリランドの首都ハルゲイサ近郊にあるガラビス地区において、貯水池の建設を進めています。ガラビス地区には、約100世帯が居住しており、この貯水池が完成すると、干ばつによる水不足の緩和が期待されます。

ボランティア・寄付活動推進事業(街頭募金) 7月7・20日/大阪

活気溢れる街頭募金



大阪梅田において、2回の街頭募金を実施しました。高校生・大学生・社会人等、様々な方々にご参加いただきました。2回目では、パネルをより高い位置で持つように心がけたことにより、視覚的にインパクトを与えることができ、募金につながりました。参加者からは「若いボランティアメンバーがたくさんいて活気があり、楽しかった!」「みんなで声を揃えると迫力があり、まとまりを感じた。」等の感想がありました。

フィリピン事業(マニラ・路上) 7月3日/バヤタス(フィリピン)

商品陳列のセミナーに参加



アイキャンとフェアトレード生産者団体SPNPは、マニラで開催されたフィリピンの各地の日系NGOが集まるJICA主催のバザーとセミナーに参加しました。セミナーでは効果的な商品陳列の仕方を学んだ後、グループに分かれて実際に商品陳列を体験しました。研修の最後には、講師の方から「陳列だけでなく、SPNPスタッフのビビアンさんの笑顔はお客様を惹きつけるのにとても良い」との高評価を頂きました。

能力強化事業(国際理解海外研修) 6月30日~7月14日/フィリピン

自分自身を見つめ直すきっかけになった海外研修



名古屋国際高校2年生の生徒20名と教員1名がフィリピンにおいてアイキャンの事業地訪問と現地の方々との交流をしました。参加した男子生徒は、「色々な人と関わり、それぞれの体験を聞き、普段の生活や自分自身を見つめ直す良いきっかけになった」と話し、女子生徒は「私が今、世界に対してできる事は何かを深く考える事ができるようになった」と話してくれました。様々な課題を自分事として考える機会になりました。

2019年8月「行動を起こすきっかけをつくる講演」

<能力強化事業（講演）>



ICAN 日本事務局
西坂 幸
～プロフィール～
大学卒業後、民間企業
での事業所運営や広
報業務を得て2018年9
月より現職。

アイキャンでは、年間を通して講演や講義、訪問受け入れを行っています。その多くは教育機関からのご依頼で、次世代を担う若者に世界の現状を伝え、行動を促すことのできる大切な場であると感じています。学生時代という様々な出会いや新しい発見があり、色々なことに興味関心がわく時期だからこそ、素直な気持ちでショックを受け、感じ、気づき、考えてもらいたいと思っています。

8月1日、聖霊中学高等学校において、中学1年生約200名を対象に、フィリピンの路上の子どもたちやNGOの活動内容についての講演を行いました。私が講演を通して伝えなかった事は、「世界にはこんなに貧しい生活を送っている人がいる」ということではありません。世界の現状やNGOの活動を知ったその先に、それぞれが「自分には何が出来るか」を考え行動に移す重要性です。今回、講演後に生徒の皆さんから、「いくら集まれば何が出来るのか」、「街頭募金のボランティアに参加するにはどうすればいいのか」等の質問を頂き、今後具体的に動き出そうとしていることが良く分かり、嬉しく感じました。

しかし、その気持ちを持続することは非常に難しくもあります。講演を聞いた直後は、ショックを受け、自分にできる事がないかを考え、何かしようという気持ちになったとしても、時間が経ち、日々の忙しい生活の中で、「あのとき聞いた遠い国や地域の子どものこと」は、頭から抜けていってしまうことも少なくありません。何かしなければと思っていた熱い気持ちは、時間とともに忘れられてしまいます。だからこそ、記憶に残る伝え方ができるように、私自身が成長しなければと、いつも意識して業務にあたっています。

私は、人に何かを教えられるような立派な人間ではありません。ですが、フィリピンの現状、自分が見た景色や子どもたちから直接聞いた声を伝える事はできます。それが誰かにとって、世界のため、自分たちの未来のために行動するきっかけとなれば、嬉しく思います。私自身、学生時代に世界の子どもたちの状況を講義で聞いたことをきっかけに、フィリピンのスタディツアーや地域のフェアトレードのイベントに参加したりして、行動を起こしてきました。これらの経験が、今のアイキャンでの活動に繋がっています。

ある日のスケジュール

11:00 メールチェック
12:00 日本事務局会議
14:00 来客・問合せ対応
15:00 講演資料作成
16:00 フェアトレード
商品管理
17:30 フィリピン予算
申請確認
18:30 語学教室対応
20:00 帰宅



フィリピン事業（マニラ・路上）

8月/フィリピン（マニラ）

子どもの家から自立訓練に参加



子どもの家で生活するジェイ（仮名）（17歳）が、自立訓練の一環として、通学しながら週3回、レストランでの実地研修（OJT）を受け始めました。「料理を作ることが好きで、将来はレストランのシェフになりたいと思っている。初めての

仕事と慣れない英語を使っでの接客は大変だけど、仕事は楽しく周りのスタッフにも恵まれているので、正規雇用されるように頑張りたい。」と意気込みを語りました。

能力強化事業（スタディツアー）

8月/フィリピン

子どもたちとの再会



アイキャンのフィリピンの事業地訪問や路上の子どもとの交流ができるスタディツアーを実施しました。参加した5名のうち、2名はリピーターの方々でした。5年前にも参加した男性は、再会した子どもたちの成長を喜んでいました。また、初

参加の女性は、「子どもたちとの交流や家庭訪問は、このツアーでないとできなかった。自分には何が出来るのかを考え、帰国後、行動を起こしたい。」と話してくれました。

ジブチ事業

8月26日/マルカジ（ジブチ）

子どもの保護センター及び多目的センターの完成記念式典



8月26日、イエメン難民キャンプにおいて「子どもの保護センター」及び「多目的センター」の完成記念式典が行われました。この事業は外務省の資金協力及び皆さまのご寄付により実施されており、当日はキャンプに住む人々の他、日本大使

館・ジブチ内務省・国際機関・各国のNGO等、多くの方々にご出席いただきました。式典では来賓によるスピーチや、子どもたちの歌が披露され、住民からは感謝の言葉を多く頂きました。

ボランティア・寄付活動推進事業（街頭募金）

8月3・24・31日/大阪

幅広い層の大阪のボランティアさんが参加



8月は全部で3回の街頭募金を行い、夏休みを利用した中学生とその保護者の方、高校生や社会人など幅広い年齢層のボランティアさんが参加しました。参加者からは、「やってみると若者や外国人などたくさんの方が募金してくれた。暑さを忘れるほど夢中になった。」との感想が聞かれました。3回目は雨のため、30分のみ活動となりましたが、20名の通行人の方々よりご寄付いただきました。

2019年9月「生きていくうえで必要な知識」

<フィリピン事業 (マニラ・路上) >



ICAN マニラ事務所
西尾 絵里
～プロフィール～
大阪大学外国語学部
でフィリピン語を専攻。現在はフィリピン
大学へ留学しながら、
2019年8月より ICAN
マニラ事務所にてイ
ンターン。

ある日のスケジュール

9:00	メールチェック
10:00	フェアトレード 商品在庫管理
13:00	パヤタス訪問
16:00	フィリピン予算 申請作成
17:00	バザーの準備
18:00	帰宅

大きなゴミの山があるマニラ首都圏ケソン市のパヤタスで、9月から「サバイタヨ」の活動が始まりました。「サバイタヨ」とはフィリピン語で「一緒にやろう!」という意味があり、元々は、危険なゴミ山で遊ぶ子どもたちの保護を目的に2002年に始まった活動ですが、約10年間の活動を経て、ニーズの変化により、活動を終えていました。現在、この地域のゴミ処分場は閉鎖されているものの、急激な経済成長により貧困の格差は広がり続け、厳しい生活が続いており、改めて再開することになりました。

9月は2回活動が行われ、100人以上の子どもたちが参加しました。塗り絵やローマ字の練習を皆真剣に取り組み、書き終わった後には嬉しそうに見せてくれました。他には、伝言ゲームやジェスチャーゲームをしたり、イラストに自分の将来の夢を描いて共有する場面もありました。子どもたちの将来の夢は、お医者さん、警察官、兵士等があり、理由は「誰かを助けたいから」というものがほとんどで、子どもたちの優しさが垣間見られました。また、年長の子どもたちはボランティアとして、活動内容を考えて自ら実行してくれたり、リーダーシップをとって、自主的に活動に参加してくれます。活動と並行して栄養価の高い食事も提供して、栄養状態の改善も目指しています。

過去のサバイタヨに参加していた子どもたちの中には、現在ソーシャルワーカーとして海外で働いていたり、アイキャンの活動に感化され、大学を出てアイキャンスタッフとして働いている職員もいます。サバイタヨの目的は、子どもたちが生きていくうえで必要な知識を学ぶことです。そのため、活動では勉強だけでなく遊びを通して、自己理解や人間関係の構築も行っています。また、歯の磨き方や手の洗い方等の衛生教育や、



「ありがとう」と伝えることの大切さや礼儀等、普段の生活の中で大切なことも教えています。

事業を担当するフィリピン人スタッフは、「沢山の子どもたちが活動に参加するため、大変なこともあります。子どもたちが真剣に学んでいる姿や、楽しそうな笑顔を見ると、頑張れます。」と語ってくれました。今後も多くの子どもたちの将来の可能性を広げることが出来るよう、私もアイキャンスタッフの一員として精一杯尽力しようと思います。

ジブチ事業

9月23・24日/アリアデ・ホルホル(ジブチ)

今年度3回目となる子ども議会



ジブチにあるアリアデ・ホルホルの2つの難民キャンプにおいて、合計61人の子どもたちによる子ども議会が行われました。ホルホルキャンプでは、「自尊心」が議題にあがりました。参加したイクラちゃんは「他者との関わり合いが、自尊心に影響を与えることを学んだ。同時に、3つの国からの難民が暮らすこのキャンプで、出身国や言語が異なることを理由に差別をすることはいけないと感じた。」と感想を述べました。

ボランティア・寄付活動推進事業

9月/名古屋・東京

2つのイベントに出展



9月には2つのイベントがありました。名古屋では聖霊高等学校の文化祭でフェアトレード商品が販売され、東京ではグローバルフェスタでフェアトレード商品とフィリピン料理が販売されました。どちらのイベントもボランティアスタッフが活躍しました。「イベントを通してフェアトレード商品を作っているお母さんたちの事を伝えることができた。知ってくれる人がもっと増えればいいと思う。」と話してくれました。

イエメン事業

9月/タイズ(イエメン)

食糧提供後の事後調査をしました



9月、イエメン南西部にあるタイズ州において、食糧提供後の事後調査を実施しました。アイキャンでは7月から8月にかけて延べ6,880世帯への食糧提供をしました。事後調査では、提供した食糧に問題はなかったか、食糧はどのように消費されたのか等、裨益者から幅広い情報を聞き取りました。ここで集められた裨益者からの意見は今後の事業運営に役立てていきます。

能力強化事業(スタディーツアー) 9月4~8日/マニラ(フィリピン)

国士館大学の学生がスタディーツアーに参加



国士館大学の生徒12名がフィリピンスタディーツアーに参加し、アイキャンの事業地であるパヤタスや、路上教育を実施しているエスコルタを訪問しました。また、今年4月に2階の建設が完了した子どもの家へ宿泊し、子どもたちとの交流を深めました。参加者からは、「友達、家族、知り合いに、見たものや聞いたもの、感じた事を話し、文字にしたい。」「フィリピンの人々のやさしさに触れた。」等の感想が聞かれました。

2019年10月「長野県における台風19号の復興活動」

<日本事業（長野・自然災害）>



ICAN 事務局長
井川 定一
～プロフィール～
フィリピン大学大学院卒業後、2005年3月にアイキャンへ入職。2008年より同事務局長。

2019年10月12日、台風19号が日本全国で猛威を振るい、浸水や土砂災害、河川の氾濫を引き起こしました。1994年より25年間、中部地域の人々とともに活動してきたアイキャンは、長野県で救援物資の提供と家の泥出し等のボランティアコーディネート活動を行っています。

長野市松代では、清掃やゴミ出しの多くのボランティアさんが来てくださる中、地域の皆さんは受け入れ対応に苦労されていました。そこで、アイキャンでは、同地区内の公民館において、ボランティアや物品寄付、資機材の管理を担うことになりました。バラバラになっていた住民への情報を一元化したり、物品リストを作成して管理できるようにしました。毎朝、各世帯のボランティアとゴミ出し用の軽トラックの必要量と必要な時間を確認し、9時頃から次々と到着するボランティアさんの受け入れ・作業の割り振り・活動説明を実施しました。また、公民館では1日を通して必要物品の管理と補充、夕方以降は情報整理や片付け、区長や関係者への報告、翌日の準備・計画をしました。そして10月末には、長野市千曲川の決壊現場に近い穂保地区の災害ボランティアセンターが被災地区内に移転するにあたり、アイキャンがエリアマネージャーとして住民からのニーズの聞き取りとボランティアのコーディネートを担当することになりました。多いときで1日約1,500名が訪れるセンターのため、全体を管理し、少しでも多くの時間をボランティアしていただくことを心がけてきました。松代でも穂保でも、一番の課題は、床下と壁の応急処置です。浸水した家屋をそのまま放置するとカビが発生してしまうため、泥を出し、消毒し、乾燥させなければなりません。被害範囲が広いと、多くのボ



ランティアさんにご協力いただいているものの、その数が全然足りていません。さらに、冬には泥が凍ってしまうため、残された時間は後僅かとなっています。

アイキャンは、住民と外部ボランティアのバランスに着目し、地域力が失われないよう配慮して活動しています。また、取り残される方が出ないように、一人ひとりに積極的に声掛けを行い、何でも言ってもらえる関係を築いています。ボランティアや物資を管理する人がいなければ、作業は効率的に進みません。アイキャンでは、今後も一人一人の力を集めて大きな力に変え、被災地の復興に貢献していきます。

ある日のスケジュール

- 8:00 ニーズ調査
- 9:00 ボランティア受け入れ・調整
- 12:00 炊き出し準備
- 15:00 片付け・翌日準備
- 17:00 活動報告
- 18:00 炊き出し準備
- 19:00 地域の調整会議

フィリピン事業（マニラ・路上）

10月12日/マニラ(フィリピン)

毎年恒例のバザーに今年も参加しました



アイキャンとフェアトレード生産者団体 SPNP が毎年参加しているマニラ日本人学校のバザーに、多くの小学生や保護者が訪れ、大盛況となりました。お揃いでヘアゴムを買った女の子2人が「早速つけてきた〜！」と見せにきてくれたり、5人組

の男の子たちはお揃いの編みぐるみを買った後、「〇〇君にも買っていこう！」と、お友達の分まで買ってくれました。SPNPのお母さんたちもとても嬉しそうに、笑顔で接客をしていました。

ボランティア・寄付活動推進事業

10月/名古屋・大阪

台風19号による被災地緊急救援のための街頭募金活動



アイキャンでは、台風19号の復興に対する街頭募金活動を名古屋と大阪で計8日間実施しました。28名のボランティアさんが参加し、460名以上の通行人の方々からご寄付をいただきました。今回のボランティアさんの中には、以前通りがけ

に募金してくださった方もいました。募金をお願いする側になったことで、「募金活動の大変さや新鮮さを感じられた。またお手伝いしたい！」と話してくれました。

フィリピン事業（マニラ・路上）

10月30日/マニラ(フィリピン)

路上の子どもの多い地域でニーズ調査をしました



路上事業のニーズ調査の一環で、路上の子どもの多い地域の見回り活動を行い、子どもたちへ声かけ等を行いました。13歳の女の子は「路上で生活している私たちの様子を見に来てくれることに驚いた。雨が降るとどこへ行けばいいかいつも

困っている。」と話し、担当スタッフは、「地域を見回りその生活を知ることは、子どもたちと信頼関係を築く上で非常に有効です。必要に応じて彼らにアドバイスをしたい。」と話しました。

能力強化事業（講演）

10月23日・30日/名古屋

イエメン内戦とジブチの子どもたちについての講演



名古屋学院大学の学生40名と、名古屋市立北高等学校の生徒23名に対して、イエメン内戦及びアイキャンのジブチでの活動について講演を行いました。「シリアやイラクは目にすることが多いが、イエメンや国内難民を多く抱えている国

はあまり知らなかったため、大変勉強になった。」や「ジブチの難民キャンプにある子どもの広場の運営を難民自身がやっているということにとっても衝撃を受けた。」等の感想が聞かれました。

～路上の子ども及び台風 19 号救援活動用ご寄付のお願い～



マニラの路上での生活



*

■ 寄付の用途 ■

1、路上の子ども 2 階部分の増築が終了した児童養護施設を活用し、より多くのマニラの路上の身寄りのない子どもたちが、愛情溢れた環境で生活し、通学することができるようになります。

2、台風 19 号救援・復興活動 台風で被災した長野市の家屋の修繕や写真洗浄、地域の再興を通じて、地域の復興を加速させることができます。

■ ご寄付の方法 ■

1、クレジットカード 今すぐお手続きできます。 <https://kessai.canpan.info/org/ican/>

2、口座引き落とし 会報同封の「振込用紙」または、下記サイト（お電話、メール）でのお申し込みをお願いします。

http://www.ican.or.jp/j/my_ican.html

■ 寄付の種類 ■

1、マンスリーパートナーになる ～継続的に応援～

毎月 1,000 円（1 日あたり約 33 円）から任意の定額を寄付して下さる「マンスリーパートナー」を募集しています。

パートナーの皆さまの誕生日には、事業地の子どもたちから素敵なプレゼントが届きます。

2、通常のご寄付 ～好きなときにいつでもできる～

「路上の子ども」や「自然災害」特別寄付：クレジットカードでは、1 口 5,000 円からのご寄付を受け付けています。

アイキャンは認定 NPO 法人のため、寄付者は、**税制の優遇**を受けることができます。

税額控除の額：その年の認定 NPO 法人等への寄付合計額（※）－2,000 円×40% ※所得税額の 40%が上限

詳しくは、国税庁のサイト（<https://www.nta.go.jp/taxes/shiraberu/taxanswer/shotoku/1263.htm>） 又はお近くの税務署へ



—マンスリーパートナーさんのご紹介— 高田 雄太郎さん 「支援の輪を広げたい」

私は大学のゼミナールを通してアイキャンのフィリピンスタディーツアーに参加しました。路上の子どもの女の子との衝撃的な出会いから、「この子たちの生活を変えたい！」と思いマンスリーパートナーになりました。なにかしたいと思っても行動に移せなかった私でしたが、これをきっかけに、これから様々な活動をしていきたいです。個人の力だけでは小さい力なので、アイキャンスタッフの方に言われた「見てきたものが真実」という言葉を胸にフィリピンで見感じたことを周りに伝えていき活動の輪を広げていきたいです。

集めています！～書き損じハガキ・未使用切手・商品券～

未投函の官製ハガキや年賀ハガキ、未使用切手、未使用テレフォンカード、商品券を、送ってください。ハガキ 1 枚が、フィリピンではノート 2 冊分、又はご飯 2 杯分の価値のご寄付になります！



認定 NPO 法人アイキャン 平成 22 年度外務大臣表彰団体

フェイスブックに「いいね！」をお願いします！

アイキャンは 1994 年より、貧困削減や紛争解決等に取り組む国際 NGO です。

住所：〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須 3 丁目 5-4 矢場町パークビル 9 階

TEL&FAX: 052-253-7299 (火曜～土曜：12～19 時) MAIL: info@ican.or.jp

Website: <http://www.ican.or.jp/> Facebook: <https://www.facebook.com/ICAN.NGO>



印刷通販

印刷 イロドリ